日本語

注意

一　試験開始の合図があるまで問題冊子を開かないで下さい。

二　この問題冊子は全部で**八ページ**あります。

三　**解答用紙（マークシート）**の所定欄に**受験番号とマーク、氏名とフリガナ**を必ず記入して下さい。

四　解答用紙（マークシート）には問題番号が1から50までありますが、**解答に使用する問題番号は1から33までです。**

五　解答時間は**六十分**です。

六　**解答用紙は必ず提出して下さい。**

七　問題冊子は持ち帰って下さい。

受験番号欄記入例

2025

受験番号				
1	9	7	0	5
⓪	⓪	⓪	●	⓪
●	①	①	①	①
②	②	②	②	②
③	③	③	③	③
④	④	④	④	④
⑤	⑤	⑤	⑤	●
⑥	⑥	⑥	⑥	⑥
⑦	⑦	●	⑦	⑦
⑧	⑧	⑧	⑧	⑧
⑨	●	⑨	⑨	⑨

数字の位置に注意してマークして下さい

マーク式解答欄記入上の注意

1．解答は，HB の黒鉛筆を使用して丁寧にマークして下さい。
2．訂正する場合は，プラスチック消しゴムで，きれいにマークを消して下さい。
3．所定の記入欄以外には，何も記入してはいけません。
4．解答用紙を汚したり，折り曲げたりしてはいけません。

マーク例

良い例 ●　悪い例 ◐ ⊗ ✓　薄いマークは読めません

次の問題文を読み、後の問いに答えなさい。

私は長く、大学教師をやってきた。ア教師と言ってしまうのはおこがましいのであって、前任の京都大学にいたときは、教育に関わる機会はきわめて少なかった。胸部疾患研究所、のちに再生医科学研究所という大学附置研究所で研究を行う教官であり、言ってみれば人生の大半(A)を研究者として過ごしてきたことになる。

定年の少し前に、同じ京都にある私学の京都産業大学で生命科学の新しい学部を作るということになり、学部長として移ることになったが、今から思えばなんとも恥ずかしいほどに教育に関しては無知であった。

京都大学にいたときも、年に数度、細胞生物学の講義を持っていたし、大学院特別講義なども分担していたが、教育システムそのものに関わるという機会はほとんどなく、今だからハク状(a)しても許される[1]だろうが、シラバスと言われても何のことだか……。授業の内容や計画を記した「講義要項」のことと分かるのは、学部長に就任してしばらく経ってからだった。単位というものがどうして決まるのかも、ほとんど知らなかった。イ

だから逆に、教育者として、新入生たちに向かって話をする、講義をするという経験は、とても新鮮であり、これまで考えなかったさまざまなことについて、あらためて考えることに、ウ考えざるを得ないことになった。

そんななかでもっとも強く感じたのは、新しく大学に入ってきた新入生たちに、大学に入った、あるいは「生徒」から「学生」になったという自覚がエきわめて薄いということがある。

いまから50年ほど前、私が京都大学に入学したとき、時の総長、奥田東先生の入学式の祝辞には（　い　）を抜かれた。奥田総長曰(いわ)く「京都大学は、諸君に何も教えません」。そのあとどう続いたのか、ほとんど忘れてしまった。「諸君が自分で求めようとしなければ、大学では何も得られない」、たぶんそんな風に展開したのではなかろうか。

大学というところは、自分に何も教えてくれない。このひと言はショウ(b)撃であった。これまで手取り足取り、先生たちから教えられてきた高校までの教育、それらとはまったく違った世界にいま自分は足を踏み入れようとしている。それはまた、心が震(B)えるような興奮であり、感動でもあった。

文部科学省は高大連携を謳(うた)い、また逆に高校の復習ともいうべきリメディアル教育がスイ奨(c)され、実施されている。いずれも高校と大学のギャップをなくし、高校から大学へスムーズに移行させようというベクトルであろう。

しかし、私は自身の経験から、オ高校と大学はまったく違った世界なのだとまず宣言するところから大学教育はスタートすべきだと思っている。高校と大学をスムーズにつなげるのではなく、意識の上で断絶させることから、大学教育を始めるべきだと思うのである。

私も高校のときには、実際によく勉強したと思っている。塾にも通ったし、模擬試験の成績も結構よかった。しかし、何のためにと突き詰めて考えたことはほとんどなかったような気がする。目の前に、入学試験という目標がぶら下がっていたからである。勉強は試験でいい点数を取るためとして、深く考えることもなかった。

勉強には試験がつきものである。勉強の成果は試験の点数で計られる[2]。せっかく勉強したのであるから、いい点数をとりたいが、そのためには正しい答えに辿(たど)りつかなければならない。

しかし、この「正しい答え」というのがなかなか曲者(カくせもの)である。そこで

はまず「正しい答え」があるということが前提となっている。あらかじめ用意された答えがあって、誰が解いてもその一つの答えに到達できるようになっている。試験とはそういうものだ。

A君の答えとB君の答えは違っているのだが、どちらも正しい、ということは、高校までの授業やテストではまずあり得ない。入学試験で、解答が二つあったり、答えに辿り着けなかったりする問題があると、たちまち新聞沙汰[d]になる。大学の責任者が頭をさげて謝罪することになりかねない。[キ]

実際、私たちが入試問題の作成委員になったとき、もっとも注意し、何度も何度も念を押すように検討するのは、問題の良し悪しよりも、答えがほんとうに一つだけなのか、ひょっとして二つ正解があったりしないか、あるいは、そもそも答えが無いといったことにならないかということなのである。

私などは根がいい加減なので、もし受験生が解答のないことに気づいて指摘してくれれば、それだけで合格にしてもいいなどと思ってしまうのだが、実際には、この「正解は一つ」という大前提は、複数の外部審査員の眼を通すことまでして、しっかり守ろうとされている。そこまでしていても時折、解答がなかったり、二つあったりして、記者会見が行われる[3]などということになるのであるが。［　W　］

答えは確かに〈ある〉。それが初等中等教育における「問題」の大前提である。そして先生はその答えを知っている。その正しい答えに、どうしたら自分たちも到達できるだろうか。先生が知っているはずの答えと自分のものが一致すれば正解で、違っていればバツ。それが入学試験も含めて、高校までの試験の問題であった。

考えてみると、これは怖いことではないか。なぜなら、小学校から高校まで、誰もが一貫して、問題には必ず答えがあるということを前提とし、正解は必ず一つであると思い込んできたのだから。教師の側も、答えが二つも三つもある問題は避けてきただろうし、答えのない問題は出しようがなかった。

どこかに正解があって、その正解は自分が知らないだけであって、誰かが（たぶん誰か偉い人が）知っていると、頭から思い込んでいること、その呪縛[c]のまま、大学においても同じスタンスで教育を受け、そして社会に出ていく。[ク]そんな社会人ばかりが増えていくと考えることは怖い（おそろ）ことではないか。

高校までの教育においては、これはやむを得ない[ケ]ことである。しかし、実社会に出て、そのような答えのある〈問題〉というのは、実は何ひとつないのだと言ってよい。

たとえば『広辞苑』は、「問題」に四つの意味を載せている。曰く「①問いかけて答えさせる題。解答を要する問い、②研究・論議して解決すべき事柄、③争論の材料となる事件。面倒な事件、④人々の注目を集めている（集めてしかるべき）こと」。

このうち、答えがあるものは①だけ。そして、実社会での問題と言えば、②から④までどれをとっても、それには答えがない。あるいは解答や正解を前提としないものである。

（　ろ　）沖縄に基地が集中している「問題」。日本全土のわずか0・6パーセントの土地しか持たない沖縄県に、全国に存在する米軍基地の70パーセントが集中している。日本人なら、これをそのまま放置していていいと考える人はおそらくいないはずである。しかし、これをどうしたらいいのか、その解決法が見つからないままに放置されているのが、放置され続けてきたのが、沖縄問題の本質である。

誰もが申し訳ないと思うけれど、それじゃあ私たちの県で引き受けましょうとは、誰も言わない。米軍基地のない日本が安全保ショウ[e]の面からやっていけるのか、と言ったより本質的な問題を措く[コ]としても、同じ国民である以上、負担は公平であるべきだという、一応の「正解」さえもここでは放置されたままである。

このような問題は、誰かに尋ねれば正解を与えてもらえるという問題では決してないのだ。また単に正解を求めるという作業だけでは決して解決できないものなのである。［ X ］

おまけに、数学や物理などの複雑な問題になると、参考書には、模範解答として、どのようにして正しい答えにまでたどり着くか、その筋道そのものを指導しているものが多い。まことに懇切[D]丁寧な指導であり、効率的な学習をするには必要なことであるには違いないが、ほんとうはここにも大きな問題があるだろう。つまり、考え方そのもの、考える筋道そのものがカク[f]一化されており、出てきた問題は、どの解き方で解けば正解にたどり着けるのか、問題の解法を考えるのではなく、すでに教えられてきた解法のどれに当てはめればいいのかを問うといったものになっている場合が圧倒的に多い。

（ は ）定石[E]にあてはめるのであり、受験勉強で多くの問題を繰り返し解く練習をさせるのは、この定石にいかにあてはめるか、その技術を叩き込んでいるのである。碁でも将棋でも、定石（将棋では定跡）を知っているということは勝つための基本であるが、受験勉強であるいは入学試験で実際に要求されているのは、ほとんどがこの定石を思いだせるかどうかにかかっていると言っても過言ではない。［ Y ］

これは受験勉強ということからはやむをえないことであり、実際、限られた試験時間のなかで、解き方を一から考えていたのでは、すべての問題を時間内に片づけることなど到底できない。定石にあてはまるものは、定石通りに打っておけばいいのである。時間を無駄にすることはない。

（ に ）、碁でも将棋でも、実際の勝負ということになると、定石（定跡）にあてはまらないところでこそ、勝負が決するのである。定石を基本としながらも、定石で打ちかえせば負けるような打ち方を、相手は当然考えてくる。知っていなければ負けるが、定石通りに打っていては負ける、というのが実際の勝負の場であるはずである。大学を卒業して、たちまちに出会う社会での問題は、このような定石では太刀打ち[たち]できない問題であることのほうが圧倒的に多い。

問題には一つの答えがあるものだと思ってきた教育と、何一つ（ ほ ）的な答えというものがない実社会とのあいだに、バッファー（カン[g]衝帯）が必要だと私は思っている。大学の大切な役割の一つは、高校までの教育と実社会とのあいだのバッファーとしての役割である。高校を卒業して社会にでる人も多いわけであり、ほんとうは高校にもそのような役割があってほしいとは思っているが、少なくとも大学には、そのような役割は必須[F]のものだと私は思う。

これまでに教わってきた解き方、対処の仕方では対応できない問題に遭遇したとき、どのように自分で考えられるか、どのような解法を模索できるか、実社会に出れば、それは待ったなしの要請として現前するはずのものである。

問いがあって答えがないという、それまでに経験したことのない宙づり状態[サ]に耐える知性。答えがないということを前提に、なんとか自分なりの答えを見つけようとする意志。それにめざめさせるのが、大学の4年間であり、その責務である。誰かに尋ねれば、必ず答えがあるはずだ、

与えてくれるはずだという（　へ　）性から脱却する必要がある。

文部科学省は大学の質保証ということを頻（しき）りに言っている。質とはどれだけの情報を詰め込むかではなく、社会には答えのある問題はないのだと、まず認識させることにあるように私には思われる。[4]

私は新入生諸君に最初に接するとき、せっかく大学に入ってきたのだから、これまで受けてきた高校までの教育をいったんチャラにしようと訴えている。デフォールト化しようと言い換えてもいい。ずいぶん乱暴な言い方だが、大学における教育は、高校までの初等中等教育と根本的に、そして本質的に違ったものでなければならないと私は強く感じるからである。［　Z　］

（永田和宏『知の体力』）

問一　二重傍線部a～gの漢字として適切なものを次の①～④から**一つずつ**選びなさい。

1　a　ハク状
①白　②吐　③博　④薄

2　b　ショウ撃
①小　②賞　③焼　④衝

3　c　スイ奨
①吹　②師　③推　④遂

4　d　沙タ
①多　②汰　③詫　④堕

5　e　保ショウ
①正　②性　③障　④償

6　f　カク一化
①各　②角　③確　④画

7　g　カン衝帯
①間　②緩　③貫　④寛

問二　波線部A～Fの漢字の読みとして適切なものを次の①～④から**一つずつ**選びなさい。

8　A　大半
①　おおなか　②　おおばん
③　たいはん　④　だいばん

9　B　震える
①　こご　②　しん
③　つい　④　ふる

10　C　呪縛
①　けいせん　②　じゅばく
③　ずじょう　④　のろしば

11　D　懇切
①　こんせつ　②　しんせつ
③　ねんごろ　④　ねんぎり

12　E　定石
①　さだめいし　②　じょうせき
③　ていいし　④　ていせき

13　F　必須
①　かならしゅ　②　かならず
③　ひっしゅう　④　ひっす

問三　二重傍線部1～4の「れる」の中で用法が他と**異なる**ものを次の①～④から**一つ**選びなさい。

14
①　1　②　2　③　3　④　4

問四　傍線部ア「教師と言ってしまうのはおこがましい」と書かれている理由として最も適切なものを次の①～④から**一つ**選びなさい。

15
①　筆者は、教師が持つべき教育に関する知識を十分に有していないから。
②　筆者の職業は、じつは教師ではなく研究所所属の研究者であったから。
③　教師と言うには学生を教えた経験が足りない、と筆者は考えているから。
④　教師というのは俗称であり、筆者の正確な職名は「教官」であったから。

問五　傍線部イ「どうして」を言い換えた言葉として文脈上、最も適切なものを次の①～④から**一つ**選びなさい。

16
①　なぜ　②　本当に
③　何をすれば　④　どのような仕方で

問六　傍線部ウ「考えざるを得ない」の意味として最も適切なものを次の①～④から**一つ**選びなさい。

17
①　考えても分からない　②　考えなければならない
③　考えることができない　④　考えてもしようがない

問七　傍線部エ「きわめて」と最も意味が近い言葉は次の①～④のうちどれか。最も適切なものを**一つ**選びなさい。

18　① 少し　② とても　③ 比較的　④ 以前より

問八　空白部（い）（ろ）（は）（に）（ほ）（へ）に入る語として最も適切なものを次の①～④から**一つずつ**選びなさい。

19　（い）① 正気　② 度肝　③ 精神　④ 心身

20　（ろ）① そして　② ただし　③ ところで　④ たとえば

21　（は）① いわば　② さらに　③ けれども　④ あるいは

22　（に）① また　② さて　③ しかし　④ だから

23　（ほ）① 絶対　② 相対　③ 中立　④ 並立

24　（へ）① 依存　② 積極　③ 能動　④ 懐疑

問九　傍線部オ「高校と大学はまったく違った世界なのだとまず宣言するところから大学教育はスタートすべきだと思っている」理由として最も適切なものを次の①～④から**一つ**選びなさい。

25　① 大学教育は、学生が主体的に真理を探究するために行われるべきであり、試験で良い点数をとるためのものではない、と筆者は考えているから。

② 大学における勉強は、何のために学ぶのかという目的意識を学生がしっかりと持たなければ身につくものではない、と筆者は考えているから。

③ 大学は、教員が学生に知識や問題解決の方法を教えるところではなく、学生が教員に質問することで学んでいく場である、と筆者は考えているから。

④ 大学の役割は、問題に対する唯一の答えがない状況でも自分なりに答えを探すことの大切さを学生に認識させることである、と筆者は考えているから。

問十　傍線部カ「曲者」の意味として文脈上、最も適切なものを次の①～④から**一つ**選びなさい。

26　① 一つに決められないもの　② 容易に分かりにくいもの　③ 気をつけなければならないもの　④ すぐれた評価を受けるべきもの

問十一　傍線部キ「なりかねない」の意味として最も適切なものを次の①～④から**一つ**選びなさい。

27
① なりはしない　② なるはずがない
③ なるにちがいない　④ なるかもしれない

問十二　傍線部ク「そんな社会人ばかりが増えていくと考えることは怖しいことではないか」と書かれている理由として最も適切なものを次の①～④から**一つ**選びなさい。

28
① 問題には正解が一つあるという考え方では、社会における諸問題に対応できないから。
② 同じ考え方をする人が多数を占めると、社会は異質なものを受け入れられなくなるから。
③ 問題に対する正解を他者が持っているという考え方は、自分で物事を考えようとする意欲を失わせるから。
④ 考え方に多様性がなくなると、物事に対する見方が固定化して様々な発想が出にくくなってしまうから。

問十三　傍線部ケ「やむを得ない」の意味として最も適切なものを次の①～④から**一つ**選びなさい。

29
① 仕方ない　② 中止できない
③ 間違っていない　④ 利益にならない

問十四　傍線部コ「一応の「正解」」と書かれている理由として最も適切なものを次の①～④から**一つ**選びなさい。

30
① 簡単に分かる正解であるから。
② 誰もが納得する正解であるから。
③ 完璧な正解だとは言いがたいから。
④ 一部の人が考える正解にすぎないから。

問十五　傍線部サ「宙づり状態」とは、どのような状態か。文脈上、最も適切なものを次の①～④から**一つ**選びなさい。

31
① どう考えてみても理不尽に思える状態
② どうしたらよいか見当がつかない状態
③ どういうことが起きたのか分からない状態
④ どうしようもなくて絶望するしかない状態

問十六　空白部［ W ］～［ Z ］のうち、「私たちは、そんな社会に暮らしているし、若者たちは、大学を出れば、そのような社会のなかで生活をしなければならなくなる。」という一文が入る箇所はどこか。最も適切なものを次の①～④から**一つ**選びなさい。

32
① ［ W ］　② ［ X ］
③ ［ Y ］　④ ［ Z ］

問十七　問題文における筆者の考えと合致するものを次の①～④から一つ選びなさい。

33　① 高校まで勉強してきたことは、大学や社会では役に立たない。

② 大学では知識そのものよりも、知識を得る方法を学ぶべきである。

③ 大学での学びを、高校までの勉強と同質のものと考えてはいけない。

④ 社会に出てから必要なのは、大学教育で得られる豊富な知識である。

日本語の問題はここまでです